

アーゼロンフードトピックスNo.1

～トレーサビリティ関連～

一昨年のBSE（狂牛病）問題、昨年の偽装表示問題、輸入野菜の残留農薬問題、添加物問題等の「食の安全」に関する問題が次々と露見し、われわれ消費者は何が安全な食べ物なのか、判断に困る事態になっている。
そこで登場したのが、消費者に向けた情報提供の手段である「トレーサビリティシステム」である。

<目次>

1. トレーサビリティシステムの最新情報.....	1
2. HACCPとトレーサビリティ.....	2
3. 広義・狭義のトレーサビリティ.....	3
4. トレーサビリティの情報管理の仕方.....	3

1. トレーサビリティシステムの最新情報

○2003年7月1日

政府は「食品安全委員会」の初代委員長に寺田雅昭氏を選任。同委員会は7人で構成されているが、科学者中心で消費者代表が不在の委員会である。事務局は農水省と厚生労働省の官僚で構成されており、当初より縦割り行政の弊害が危惧されている。

(寺田雅昭氏)

神戸市出身66歳。国立がんセンター総長等を歴任され、がんの基礎研究の第一人者である。

○2003年6月25日

第7回食品の表示に関する共同会議（農水と厚生労働両省合同）で加工食品の原料原産地表示についての見解を提示する。

1. 義務表示（一括表示）の基本原則（特定の商品に適応されるルール）
8品目：農産物漬物、野菜冷凍食品、塩干魚類（あじ、さば）、塩蔵魚類（さば）、うなぎ加工品、塩蔵わかめ、乾燥わかめ、かつお削りぶし
2. 任意表示（一括表示外）の基本原則（全ての加工食品に共通のルール）
3. 義務表示の表示方法
使用原材料が特定の出産地であることの強調表示は可能だが、使用割合の明記が義務付けられている。場所も強調表示に近接した個所又は一括表示欄内に規定。

○2003年6月18日

ユビキタス ID センター（坂村健東大教授）は国内 170 社と世界標準仕様を目指して共同開発を発表。IC 無線タグの標準化と商業化を目指し、スタートする。

《内容》

米オート ID センターと異なり、バーコードから RFID タグ、サーバシステムまでをクラス 0 から 8 まで分類した包括的な標準化である。

《認定された ID タグ》

日立	「ミューチップ」
凸版印刷	「T-ジャンクション」
東大坂村研究室	「e トロン / 1 6 - A E 4 5 X」

ユビキタス ID センターでは YRP 横須賀テレコムリサーチパーク、よこすか葉山農協、京急ストア、東大との共同で生鮮野菜のトレーサビリティの実証実験計画をスタートさせた。NTT データでも、マルエツと共同で生鮮野菜でのトレーサビリティ実証実験を行うと発表。

○2003年4月25日

農林水産省総合食料局および（社）農協流通研究所は、平成 14 年度農林水産省補助事業において「食品のトレーサビリティ導入ガイドライン策定委員会」によって作成された『食品トレーサビリティシステム導入の手引き』を公表した。

《内容》

用語の定義：「食品のトレーサビリティ（追跡可能性）」

生産、処理、加工、流通、販売のフードチェーンの各段階で、食品と その情報を追跡し遡及できること

これは ISO9000（2000 年度版）の「考慮の対象となっているものの履歴、または所在を追跡できること」を意識している。そして、「製品のトレーサビリティは材料および部品の源、処理の履歴、出荷後の製品の配送および所在の各項に関連する」と記述されている。

2. HACCP とトレーサビリティ

「トレーサビリティ」のキーワードは、『安全』、『安心』とよく言われているが、フードビジネス業界での『安全』と『安心』は同格ではない。それでは、どう違うのだろうか。

○フードビジネス業界の『安全』・・・HACCP システムに基づいた安全性の確保

↓
予防処置対策

↓
科学的証明・検証

○『安全』と『安心』のつながり・・・「From Farm to Table（生産者から消費者まで）」の各行程毎に、HACCP ができていること

↓
その情報を消費者に開示

↓
食の「安心」

つまり、「トレーサビリティ」は『安心』を消費者に提供することであり、『安全』は、HACCP システムを構築することである。

今後の動向を注目していきたい。これからのフードビジネス業界はますますグローバルな展開になり、そこで勝ち残るには国際感覚が重要になってくるため、さらに ISO 22000 の重要性がでてくるであろう。



3. 広義・狭義のトレーサビリティ

トレーサビリティには、「広義のトレーサビリティ」と「狭義のトレーサビリティ」がある。

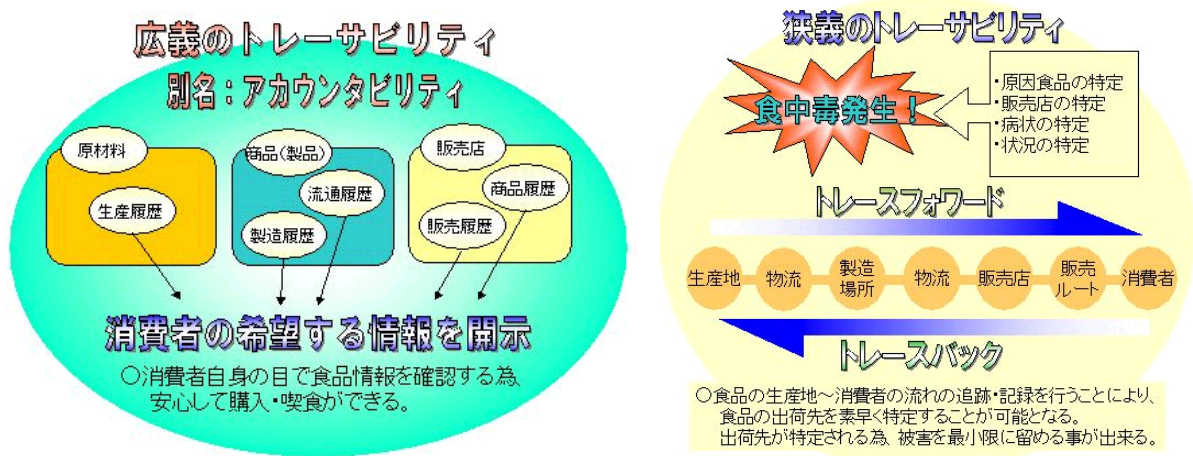
○広義のトレーサビリティ

別名「アカウントビリティ」とも呼ばれており、製品の原材料の素材、生産、製造履歴、商品（製品）の製造履歴、流通履歴等を記録し、消費者よりの希望する情報を開示することによって、商品の信頼性を高め、消費者の安心感を確保する手段

○狭義のトレーサビリティ

商品に予期せぬことが発生した場合、いち早く、その原因を追求できることと、「トレース バック」「トレースフォワード」ができる手段。「トレースバック」するには、その商品出荷ナンバーと製造ロットナンバーが一瞬にしてわかり、「トレースフォワード」で、その製造くナンバーの出荷先がわかることが必要。これが出来れば、被害を最小限に抑えることができる。

フードビジネス（外食・中食・食品加工業）に携わる方々の、「トレーサビリティ」とは、「狭義のトレーサビリティ」を意味している。



4. トレーサビリティの情報管理の仕方

「トレーサビリティ」の情報管理の仕方には、「集中方式」と「分散方式」の2通りの方法がある。

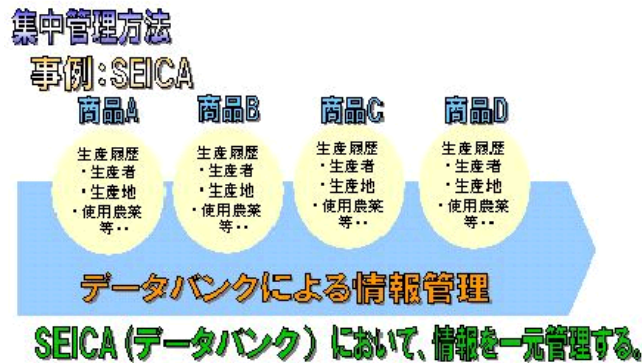
○集中方式

生産農家・使用農薬・収穫日時・農協市場・物流配送・消費地市場等の情報を一元管理する方法

【欠点】輸入野菜の対応が難しい。加工食品には不向き。

【例】(財)食品流通構造改善促進機構と(独)食品総合研究所の開発した青果物のネットカタログ

『SEICA』システム (<http://www.seica.info/>)



○分散方式

“From Farm to Table（生産者から消費者まで）”の各工程毎にデータを管理。それを何らかの「識別子」を使って「串刺し」する方法。（「識別子」には、「バーコード」と「二次元バーコード」を使用。2002年には米国でテロ対策として航空貨物に「無線ICタグ（RFID）」が使われ始めた。）

【「識別子」を使って「串刺し」する方法】

①「識別子」を付ける

- ⇒生産地の生産物にID（認識番号）が付く
- ⇒物流IDが付加
- ⇒加工工場で製造IDが付加
- ⇒物流ID
- ⇒販売店IDが付加
- ⇒消費者の手に渡る

②“From Farm to Table（生産者から消費者まで）”の生産者、生産地市場、物流、消費地市場、物流販売店毎の、

- 日時（入荷日時、出荷日時、製造日時 etc）
- 品名
- 数量（ロット単位）
- 温度のデータベース

を各工程毎に作成し、IDにデータを添付していく。

もし、不測の事態が発生した場合、このIDで一瞬にして生産者まで遡り、その生産ロットを突き止め、同じ生産ロット番号の出荷先を割り出すことができる。

この「識別子」のツールとして、これまでバーコード、二次元バーコードが使われてきたが、今後は、データ収容能力の大きな、しかも使い勝手のよい無線ICタグが中心となるであろう。

分散管理方法

